

23回目 モイモイのモイ

(一歩一歩のたった一歩)



参加選手中最年少 (11 歳) チャンの予選 1 回目のアテンプト



記録・放送デスクで、奥さんからの計算結果を受け取り、成績を集計、順位を決める僕。左は通訳のヒアさん

目指せ、 アンコールクライマー誕生!!

アンコール・カップ (2)

(前号ワークショップ参加の給金の続き)

引率教師1人がバイクで3人の生徒を連れてくる想定だ。そして、僕は地域ごとの基本料に生徒数を掛けた金額をこの引率教師に支払う。スムロンは最初、根拠不明な見積もりを僕に見せた。しかしそれで僕が納得するはずもなく、最終的にこの給付金は大きく補正(縮小)さ

プライズ

給付金がこういう調子だと、入賞のプライズ(賞品)につい

れた。どうやら彼は教師仲間を、おいしい給付金で釣ったらしい。お陰で彼は面目が潰れた。クライミングの普及を思う彼の情熱は見上げたものだが、クライミングがいくらフェアを誇るスポーツといってもこれじゃなく、と僕はため息をついた。

てはさらに厄介だろうと予想できた。案の定、スムロンは現金賞金を、あたかも自明の理のように提案し、キムスロイもそれをあっさり支持した。現金は労働の対価であり、施し(寄付)に依存しきつた経済感覚から、子供たちを守る必要があると僕は常日頃から考えていた。この議論は興味深かったので、僕は毎週、ねちねちと議題にあげた。例えば、プライズの一部として幾らかの現金を、奨学一時援助金として加えたらどうか、なども提案してみた。でも、スムロンはどの案についても、ナゲヤリにこういった。君がそうしたいならそうしてくれ、と。しかし、この認識の乖離は簡単に決着がついた。オリンピック委員会が、青少年主体の競技会において、現金賞金は好ましくないとガイドラインですでに明文化していることが分かったからだ。これをスムロンに言うところだ。これの反論はなかった。これぞ上意下達。従って、本質的な問題は何も解決しないまま、今日に至っている。

最大の収穫

かくして2012年1月、第1回アンコール・カップは開催された。IFSCルールに準拠したリード競技に15人、オリジナルのルールでのトップロープ競技に23人が出場した。朝の7時にスタートして午後5時まで、ほぼフルに1日掛かった。圧倒的に人手が足らず、運営は兼任の嵐だった。翌週行った反省会で、僕は66点もの不手際を素直に認めなければならなかった。なかでもビレーヤーの問題が大きく浮かび上がった。スムロンがほとんど一人でそれを担当したのだ。午後に入ると彼の疲労は激しくなり、事故のなかったのが奇跡ともいえるような状態だった。また、公募したルートセッターも適任が見つからず、やむなく自前で対応。結果、ルートグレードが実情にマッチしておらず、スーパーファインナルが2回必要になってしまった。しかし、お陰でどの役割も重要であり、それをみんなが他人事でなく身をもって知ることができた。そしてそれがじつは最大の収穫だった。

(続く)